オセアニア

＜オーストラリア＞ 2003年3月1日、州立ニューサウスウェールズ図書館で、新聞誕生200周年のシンポジウムが開かれた。オーストラリア最初の新聞は英国植民地時代の1803年3月5日囚人ジョージ・ハウの手によって創刊されたシドニー・ガゼット・ＮＳＷ・アドバタイザーである（1842 年まで）。以降イギリス・ジャーナリズムの影響が強い中で成長した。

さて、2000万人に少し欠ける人口のオーストラリアには現在、48の日刊紙（全国紙2紙、大都市＝州都＝日刊紙10紙、地方日刊紙36紙）と10日曜紙がある。日刊紙数はこの10年あまり、ほぼ変わらない数を保つ。しかし、総発行部数は350万部から300万程度に落ちこんでいる。州都で発行される日刊紙は月－金発行とは別に土曜日版があり、多くの場合1.5から2倍の部数が発行されている。上位５大社はニューズ、ジョン・フェアファックス、APNニュース＆メディア、ルーラル・プレス、ウェスト・オーストラリアン、トレイディング・ポスト・グループ。

全国紙はジ・オーストラリアン（1 部価格、発行部数、増減比、読者数の順、1.2ドル、13.2万部、+1.5%、読者数＝43万人）と経済専門紙オーストラリアン・フィナンシャル・リビュー（2.5ドル、8.5万部、-3%、29 万人）。同国最大の発行部数を誇るのはシドニーで発行されている日曜紙サンデー・デレグラフ（1.5 ドル、73.4万部、+1.6%、193万人）。高級紙として知られるメルボルンの『ジ・エイジ』（1.2ドル、19.7万部、±0、69.9万人）はかつて30万部近くあった。日本人観光客になじみのある大陸北東部のケアンズで発行されているケアンズ・ポスト（マードック系、2.9 万）は、2002年創刊120年を祝ったほど息の長い地方日刊紙のひとつである（創刊時はケアンズ・テレグラフ）。

オーストラリアのミニ・モガル（小メディア王）として話題になっているのがアンドルー・ゴードン。彼は、最大の地方テレビ局ネットを所有するWINのブルース・ゴードンの息子で、キルヒや日本のメディア社で働いた経験がある。スペインのメディア・モガル、Ｊ．モル率いるユーロ＝パシフィック社（バルセロナ）が月刊誌アデレード・リビューを買収獲得した。いずれ地方日刊紙の分野に進出すると言われている。

2002年末、日本人向け有料テレビ（NHKワールド・プレミアム）を放送していたオプタスビジョンが突然送信を中止した。日本人市場が小さく、採算がとれないという経済的理由からであるが、多言語放送SBSが早朝に放送するNHKの前日9時のニュースと毎週一度メルボルンからの全国ラジオ放送（FM 波）を除けば、定時の日本語放送は少ない。他方、有料テレビ最大手フォクステルとオプタスの番組共有配信事業計画に反対していた豪州競争・消費者委員会（ACCC）は一転して承認認可する方向に傾き、チャンネル視聴数の増加、料金割引などが期待されている。

昨年来浮上したメディア規制緩和（新聞・TV 局の相互所有規制の撤廃など）に関しては、メディアの寡占化が懸念されるなか、上院が否決した（03年6月27日）。

＜ニュージーランド＞ 2002年7月、ドミニオンとイーブニング・ポスト（いずれもマードック系INL社傘下のウェリントン新聞社が発行）が合併し、ドミニオン・ポストの題号で朝刊紙として再出発した。両紙はスタッフは別であったものの、広告や紙面製作の協力、印刷施設などを共有していたが、人口40万人ほどの首都ウェリントンで日刊2紙を続けていくことは難しかった。ドミニオンは1907年、当時のニュージーランド植民地が自治領（ドミニオン）になった年に創刊された。それ以上に、オークランドから遷都が行われた1865年創刊、140年近い歴史があり、ニュージーランド、オーストラリア両国で最後まで残った大都市夕刊紙でもあった夕刊紙ポストの方は、1974年に10万部あった部数が5万5000部まで落ち込んでいた。ドミニオンも68年当時が最盛期で7.7万部あったのが7万部にまで減った。

そして 2003 年に入り、オーストラリアのフェアファックス社傘下のフェアファックスNZがこのINL社株を買収し、ニュージーランド・メディア市場へ本格的に参入。またこれまで1日遅れで空輸されていた同社発行のオーストラリアン・フィナンシャル・リビューをオークランドで現地印刷して発行するなど、積極的な展開を示している。

ところでオークランド工科大学（AUT）をはじめとしてニュージーランドの大学やポリテクにはジャーナリズム、マルチメディア、PRなど様々な専攻がある。カンタベリー、ビクトリア大学にはジャーナリズム学科がある。1950年代大学卒業の資格をもっていたジャーナリストはわずか5%を超えなかったが、現在はほぼ大卒であり、とくに上記のコースで学んだものがほとんどである。女性の進出が4割を超え、また30歳台以下が半数というのもニュージーランドの特徴である。

※発行部数は ABC 調査(2003/6/30) 、NZABC 調査（2003/3/31）から。増減比は前年同期。読者数調査はMorgan Research（2002年12月）から。

上智大学文学部教授　鈴木雄雅（すずき・ゆうが）